

まえがき

第18回オリンピック冬季競技大会の閉会式に臨んだ清水宏保選手(スピードスケート 500M 金メダリスト)は、次のようなコメントを残している。そこには、頂点を極めているアスリートが、同時に「新しい自分づくり」に着手し始めている姿を読みとることができる。

“…目標を達成してわきあがってきたのは「競技の頂点は人間としての頂点ではない」という当たり前の思いでした…(中略)…「競技者である前に、人間としてやるべきことをきちんと見つけていかなければ」という気持ちです…(中略)…金メダルは人生の通過点…”(1998年2月23日 朝日新聞朝刊)

アスリートとしての役割を中心として形成された「今までの自分」は、時として、目標達成や競技力低下、怪我など、競技生活の中で遭遇する様々な出来事を契機に組み換えられねばならない。清水選手の場合であれば、アスリートとして掲げた「金メダル獲得」という目標を達成し、これを「人生の通過点」と捉え直すことによって、アスリートとしての「今までの自分」のみでは、なかなか見つめ直すことのできなかつた「人間としてやるべきことをきちんと見つけていく」ことの大切さに気づいていったと読み取れる。そのような体験は、個々のライフサイクルの中で位置づけられながら意味をなさなければならない。そして、それは、いずれ現役を退いた後に歩む人生の中で大きな役割を果たすに違いない。競技引退は、その後の人生を歩んでいく上で大切な「新たな自分づくり」を求められる最たる出来事であり、程度に差はあれ、アスリートである誰もがこれを避けて通ることはできない。彼らの中には、引退後の

社会生活にうまく適応できる者もいれば、そうでない者もいる。そして、その「そうでない者」の中には、深刻な不適応を呈する場合も決して少なくはない。

また、アスリートとしての頂点を極めたからといって、その後の生活が保証されるわけではないし、たとえ保証される世の中が到来したとしても、個人の主体性がそれに盛り込まれなければ、その“保証”は何の意味も持たない無用の長物となってしまう恐れがある。特に、諸外国においては、“ポストアスリートの生活”を問題視する声が高まっており、これに対していくつかの専門的介入プログラムが既に実施されている。そのような支援的環境が整備されつつある現状にあっても、当然ながら、引退後の「アスリートではない新たな自分」は、アスリート自らによって探求されなければならない。

本研究は、個々の適応に焦点を当てながら、アスリートの競技引退に関連する問題を扱っていくことにする。ここでは、個人のライフサイクルの中で現役を引退することが、彼ら自身にとってどのような意味を持つのか、彼らはアスリートである自分からアスリートではない新たな自分への組み換えをどのように行っていったのか、そして、そこでの体験はその後の人生にどのように影響するのか、といった疑問に答えていくことが中心的な課題となる。このように生涯発達（life span development）の観点からアスリートの競技引退を捉えるとき、引退後の適応過程は、その後の社会生活へのスムーズな移行をもって良しと判断するわけにはいかなくなる。

我が国の競技スポーツ界の最先端に君臨していた元アスリート達が語る競技生活は、想像を絶するほどの競技に対する「傾倒(commitment)」と「献身(dedication)」によって支えられており、そんな中であって、

彼らが「アスリート以外の自分」を肯定することは果てしなく不可能に近い (Broom, 1981; Werthner & Orlick, 1986)。しかし、「競技引退」はどのようなアスリートにも必ず訪れる。そして、これを契機に、それまで自己を支えてきた「アスリートである自分」に何らかの転換を迫られることになる。そこでは、「幕引き」や「引き際」に対する拘りを持つ者もいれば、なかなか思い切れずに競技への「未練」を呈する者もいる (Murphy, 1995)。他方、大した問題もなくスムーズにこの時期を過ごす者もいる。こういった違いには、彼らが「アスリートとして競技生活をどのように過ごしてきたのか」が大きく影響すると予測される。吉田ら(1999)も、同じ世界で競技を行ってきた者でも、引退に問題を抱える者と抱えない者がいることに着目し、①その影響や関連要因を明らかにしていくこと、②引退後にスムーズに適応していける者といけない者には如何なる違いがあるのかについて解明していくこと、等が競技引退をテーマとした研究の今後の展開において重要な課題であると指摘している。このような引退後の「違い」には、どのような要因が寄与するのだろうか。

また、引退後、新たな自分が確立されないまま、社会的役割を遂行せねばならない立場に置かれることも珍しくはない。引退直後から仕事や生活の忙しさへ身を投じ、ある程度の時間が経過したときに、初めて自らのこれまでの歩みを振り返ることもあるだろう。そういった時に、今まで活発で適応的な生活を送ってきた裏に潜む問題は、より深刻なものとなって自身にふりかかってくる恐れもある。そう考えると、彼らが競技引退をどのように体験し、その後の適応に向けてどのように取り組んでいくかは、来るべき次の発達の危機への対処に影響するかもしれない。

従って、アスリートとして現役時代をどのように過ごし、引退をどの

ように体験したのかを明らかにすることは、その後、彼らがそれぞれの人生を歩む上で大きな意味を持つに違いない。そこには、共通する心理社会的な発達課題やプロセスが認められるのではないだろうか。そして、こうした疑問に答えていくことは、「アスリートはどうあるべきか」といったテーマにアプローチしていくことにもなり、ひいては、競技引退に関連して生起する適応問題への具体的な援助法を検討することにもつながっていくと考えられる。

それでは、競技引退体験を通じて更なる発達や成長を期するために、アスリートには「何が求められるべき」なのだろうか。この疑問を解くためには、「アイデンティティ再体制化 (identity reconfirmation)」が有効な視点になると考えられる。

一方、個々のアスリートの競技引退体験を説明し、理解し、これに伴う問題へ介入していく上で、すでに引退した元アスリートについての事例をとりあげ、これを詳細に検討することは非常に重要な意義がある。高い競技レベルを維持してきたアスリートが競技引退を経て、新たな社会生活へ移行していくプロセスは、新たな生活への適応が課せられるプロセスであるといえる。このようなプロセスは多面的で、複雑かつ個人的であるにも関わらず、この間の個々のアスリートに「何が」「どのように」影響するのかを検討した実証研究は少ない (山本ら, 1999)。また、Ogilvie & Howe (1986)は、競技引退に関連した問題を究明していくために、事例研究の必要性を訴えている。つまり、アスリートが引退後の社会生活に適応していくプロセスは、まさに力動的であって、これに関連する体験について多くの情報を含む個々の事例を詳細に検討していくことによって、個人の直面した問題を浮き彫りにし、その時々の方々の内面により一層深く迫ることができるのではないだろうか。

本研究の多くの部分は、個別に行われたインタビュー調査によって収集された調査資料を中心に考察を行っていくわけだが、そこには、1対1で行われるインタビュー調査の特質が否応なしに反映されることになるだろう。そもそもインタビュー (interview) とは「(人) と会見 (面接) すること」を意味し、“inter-”と“view”から成り立っている。前者は「中」「間」「相互」、後者は「見る」「眺める」「調べる」といった意味を有している。つまり、インタビューの中では、面接者 (調査実施者) が被面接者 (調査対象者) を観察するばかりではなく、被面接者 (調査対象者) も面接者 (調査実施者) を観察することにもなる (土居, 1977)。この両者の間に成立する暗黙の関係性の中で生じる物語には、その時にその両名によってしかあり得ない特質が含まれているといえよう。序論で触れるライフストーリー法は、こうした特質を充分考慮した方法といえる。

また、個別に行う1対1のインタビューの中では、これまでの歩みを調査対象者自身が振り返る作業が中心となる。そこでは、調査実施者と調査対象者との間に、事実関係とは異なる「語り」が生じることも充分予測された。しかしながら、本研究者は、その「語り」の中にこそ、多くの「内的事実」が存在していると考えている。なぜならば、彼らの語るこれまでの自身の歩みに対して、本研究者自身がそこに身を投じ、これを追体験していくという了解的な実証であればこそ、彼らの体験した内面に一層深く近づくことができると考えるからである。

このように、元アスリートの一人ひとりを大切にしながら、そこから得られる多くの情報がある筋を持った物語として解釈していくことが事例検討では求められる。そのような作業を積み重ねることによって、彼らの「生きることの質 (quality of life)」に関する洞察を深めることが

でき、「アスリートはどうあるべきか」といったテーマに少しでもアプローチできるのではないだろうか。

本研究の最後には、それまでに検討してきた課題を踏まえて、若干ではあるが、専門的援助へ向けて有効な提言ができると考えている。この種の問題領域においては、支援を前提とした研究展開が求められることは免れ得ず、従って、アイデンティティ再体制化の観点から、専門的援助へ向けての提言を行いたいと考えている。